六　經濟史と時事問題

（改定經濟學研究　第二篇八）

經濟史と時事問題

最近の東洋經濟新報は漫言欄に『松方伯とシュモラー』と題し、伯がシュモラー教授を評せる言として傳へて曰く、『此人の講義は多く昔を語らぬ、勉めて現在の活問題を解釋する、さればこそ社會に對して非常の利益を與ふるに因り、其聽講者中には多數の實業家政治家等を見受ける、此等は日本の經濟學者の少しく留意して貰ひ度い所である』と。松方伯果して眞にかゝる言を爲したりしや否や余輩は其の出所を確むべき途を有せず、從つて眞僞の責任は一に擧げて之を漫言子に委する外なしと雖も、予は世に斯く傳ふる者の必らず誤聞に出でたるものなるを信ぜんとす。蓋し今方天下に經濟學者を以て數ふべきもの洵に多しと雖も、好んで最も多くの昔の事を語るは、實に最新歷史派の泰斗シュモラー教授其の人なる事は、少しく經濟學界現在の活現象に通ぜるものゝ洽く知了す

る所なるを以てなり。遮莫漫言子は更に之に附記して曰く、『夫の獨逸の經濟上の發達は固より樣々の原因に依る可しと雖も學者連が勉めて刻下の事實に注意し、侃々諤々活社會の活問題を解決する事も必らず其の一大原因なるに相違ない……』と。是れ實に克く歴史的現實的經濟學者の現情を盡して餘蘊なきの言なり。

蓋し『昔しの事を語らぬ』は卽ち活社會の活問題を談ずる所以なりとは、皮相の見より言へば自明の理にして、更に一點の疑を挾むべからざるに似たり。玆を以て獨逸の經濟學者が現實の活問題に就て、其解決を與ふるに與て力あるは此の『昔しを語らぬ』が爲めなりと、此の推斷は一應因果相離る可からざる所と見るも敢て不可なきが如し。故に漫言子が松方伯の言として傳ふる所畢竟此の理合を言へるものならん。然れども經濟學界の現實は却て其の反對に出で、シュモラー、ワグナー、ブレンタノの三碩學は勿論獨逸經濟學者にして、苟も現在の活社會に鴻益を竭すの人々は、何れも盛に昔しの事を談じ、經濟史の研究に目も維れ足らざるの勢を以て熱心鋭意するの現情なるを如何せん。是れ豈に奇々妙々の現象にあらずして何ぞや。シュモラーは經濟史の研究に預て功勞あること、方今何れの經濟學者も之に比肩すべきものなく、又氏が自白せる如く過去三十六年間の研究は主として過去を談ずるに存し、其の著述の白眉とも稱すべきは皆經濟史の範圍に屬するものなり。而して氏が最新著として知られたる經濟原論は每頁言經濟史に及ばざるはなし。一度氏の講筵に臨みたる人々は、氏が現在の活問題に關し侃々諤々明快痛切の解說を下すに敬服すると同時に、其の歴史上の材料該博豐富にして之を引用例證するに易々にして巧なる、日常茶飯事の如きものあるに驚嘆せざるものなし。ブレンタノ、ワグナー二氏も亦多少其の流儀を異にするとは云へ同一筆法に出で、過去と現在と兼ね通ずるの洽博にして深遠なるは、敢て講筵に臨まざるも一度其の著書を繙きたるものゝ直ちに首肯し得る所たり。蓋し三碩學は共に獨逸の最近社會政策上に至大の感化影響を與へたる所謂講壇社會黨の創立者にして、又同時に歴史學派の巨擘たり。近時同國に海軍擴張問題の起るや、論議厲發熱張遂に講壇海軍黨 Katheder-Marinisten の綽名を世人より買ふに至りしもの、亦此の講壇社會黨の先達たる人々にあらずや。又勞働團結抑制案の議會に上るや、奮鬪寧日なく終りに議會をして其の言に傾かしめ、此の案を否決せ

しめたるは過歴史派の評を屢々蒙れるブレンタノ教授にあらずや。然り而して朝野共に其の片言隻句と雖も之を忽にせず、其の賛否は時に或は克く一政黨の嚮背よりも重しとせらるゝは亦た實に此の三氏にあらずや。刻下獨逸の最大問題たる『通商條約改訂問題』に關し最も朝野の耳目を聳動せしめたるは實に此のブレンタノとワグナーとの一大論戰にあらずや。而して時人が二氏に對する評論中最も多く聞かんことを欲したるは、蓋しシュモラーが懷抱したる意見にてはあらざりしか（最近商政經濟論參照）

以上縷述したる所に據り一見奇々妙々たるが如き事實は、吾人に教ゆるに何等の教訓を以てするや。他なし。獨逸經濟學者の活社會の活問題の解釋に勉め、依つて以て世運に大裨益を與ふるは、「多く昔の事を語らぬ」が爲に非ずして、却て盛んに廣く且つ深く昔の事を研究し、經濟史研究に熱心鋭意する結果にあらずして何ぞや。固より經濟史の研究は其自身亦大に必要なる者あるは言を俟たず、戰鬪紛亂の記述に於てすら、如何に多數の民衆が其下に苦みしかを政治上の出來事を知ると同時に、其時代に於ける國民全體の物質上の狀態を看取するは、蓋し歴史其者の立場より見るも甚だ肝要なる事と謂ふ可し。

故に最近史學者にして亦此の經濟史の研究に思を潜め、所謂 Economic interpretation of History に勉むるものあるは頗る歡迎す可きの現象なり——ラムプレヒト、ベロー兩氏の如き——而も經濟史の研究が今日諸國に爾かく盛を致すに至れるは、啻に其自身の必要のみならず、所謂 Historical interpretation of Economics を任とし今日を比較的適當に解釋し、將來に向て善良なる方針を得んが爲に好んで過去の變遷發展の跡を尋求する所以にして、今日の經濟學者が共に一知半解の『原理論』よりも、先づ經濟史に通ずるを以て經濟教育の第一の務とし、經濟史を知らざるものは亦共に現在の經濟生活の活問題に喙を容るゝの資格なしと斷ずる所以蓋し茲に在り。アシュレー教授曰く、

It is no longer worth while framing general formulas as to the reations between individuals in a given society, like the old „laws" of rent, wages, profits; and that what they must attempt to discover are the laws of social development—that is to say, generalisations as to the stages through which the economic life of society has actually moved. They believe that knowledge like this will not only give them an insight into thepast,but will enable them the better

to understand the difficulties of the present. Ashley, English Economic History. I. i. XII.

と。是れ即ち現今最も進歩したる經濟學者の一般に認許する見解にして、平易の言を以て言換ゆれば、活社會の活問題を解決するに明快の頭腦と老熟せる判斷とを以てし、國民をして其適歸する所を知らしめんが爲めに盛んに過去を研究する事、即ち今日の經濟學の最大任務とする所なりと云ふの意に外ならざるなり。

我邦刻下重要なる經濟上の活問題多し。而も何等の問題と雖も遠く外國の類例に鑑み深く過去に溯て歴史的に其原因を窮むるを要せざるものあらんや。蓋し所謂『學者獨り氣焔を吐散らす』は實に此の經濟史研究の盛行せざる時代の當然の現象のみ。誰か先づ藥を投ずるに先て其病狀を診察し其病源を見定めざるものあらんや、而も經濟史の研究によりて其眞相を窮めたるにあらざる今の經濟論は診察せずして投藥すると一般、危險にして無謀なる亦此上なしと謂ふて可なり。經濟生活とは金融市場と同意義にして、一國の經濟問題は金融の繁閑財政の遣繰等の問題にのみ盡きたるものなれば已む。苟も然らずして經濟學者の着目す可きは國民經濟全般に渉る現象なりとせんか、我邦今日の問題は財政難資本の缺乏、地租增否等の問題のみに了らずして、遙かに重要なる根本的大問題の切實に經濟學者の解決を要す可きもの多々あるを知らざる可からざるなり。而も先づ精到綿密なる歴史的、現實的研究を要せずして直ちに解答せられ得可きもの果して是れありや。如此歴史的研究に基かざる經濟策は皆皮相淺薄の見にあらざれば即ち一時姑息の彌縫策のみ。永遠に渉る眞乎の解決は到底望む可きにあらず。彼の外資輸入論や、勤儉貯蓄論や、何れか眞率なる學問上の議論と見做すを得可きや。經濟學の研究を要せずとも收支償はざれば、或は他より借入れ或は支出を減少せざる可からずと言ふが如きは、平々凡々コンモンセンスより打算し得るの論に非らずや。而も歴史的、現實的研究を勉めざる我邦の經濟論は這箇の難關を救ふ可きの策として、此の如く淺薄平凡なる救治策の外何等解答を與ふることなきなり。

經濟史の研究は之に反し吾人に教ふるに如上の如き机上の空論を以てせず。一國民經濟の發展の大動機は、懸りて深く人類の天性其者に存し、而して我邦今日の最大急務は外資輸入の如き姑息の問題にあらず、又勤儉貯蓄の如き消極の方法にあらず、如何にして

國民の生産力を增進す可きかの根本問題の解決なるを以てす。貯蓄或は輸入によりて一時一國内に存在する富の量を增加するとも、之れを活用して大飛躍を試むるを得せしむ可き淵源は、卽ち其の國民の生産力の大小に在りて存す。生産力增進せざる以上は姑息なる一時の借入、消極的の貯蓄抑も何の効かあらん。數年を出でずして煙散霧消せんのみ。故に消極的勤儉論によりて國民の消費を必要以下に制限するの結果、其の生産力を減殺せしむるが如きことあらば、其勤儉貯蓄論は却て國運の進捗を碍害す可き原因となり、姑息なる外資輸入は之を利用す可き企業者と企業の組織の進まざる間は、却て歐米諸國の掠奪の目的となるに了る事、猶ほ昔時の西班牙の如くならざるを保す可からず。卽ち勞働生産力の增進、企業組織の改善殊に企業者の養成は、遙かに重要なる根本問題なるを亦多言を要せざる可きなり。（予は去三十二年勞働經濟論（本全集第五集所收）を公けにして此意見を世の識者に問へり）或は又我邦商業道德の幼稚なるがため、商業の發達を杜絶するの現象は經濟史に鑑みずして如何なる正當の解決を得たりしや。徒らに我商人に向て道德を改善せよと說法し、商業學校に商業道德を課するに止まるが如き手段にては、我商業道德の改善は到底望む可きにあらず。要するに其眞原因は個人性の發達せず、社會上、經濟上猶ほ昔時の遺物たる共產的精神の餘波を止むるに依るにあらざるはなし。（『世界經濟と商業道德』參照）從て其救治策は共產制の遺物の打破を早からしめ個人性の發達を圖るの外道あらざるなり。其他物價の變動の如き、地租の問題の如き、工場法の問題の如き、經濟史に待つことなくして克くコンモンプレース以上の解答を得たるの例果して之ありや。經濟史に通ぜざる人は如何に足五大洲に洽きも其盛大を窮めたる眞因を察する能はず。洋行歸の經濟學者多く言て曰く、歐米富强の基は勤儉貯蓄に在りと、時人亦之れに和して名論卓說と稱す。而も如此は平々凡々當然の事のみ。浪費濫用するものゝ富みたる例なきは之れを個人に徵するも直に知り得可し、何ぞ必しも專門の經濟論を須ひんや。或は米國の將來恐るべきを說て其の天然の富源を說く又平々凡々の皮相觀のみ。其の眞因は深く長く歷史の中に在り。歐米の今日の盛大を致せるは資本の力よりも、寧ろ其の人民の生産力の强大なるに在り。此の生産力の增進は亦必ず多量の消費を必要とす。我邦の紳士も歐米の下流社會に比すれば猶ほ遙かに儉約と稱するを得可し。何んとなれば其の消費する經濟財の實質分

量遙かに少ければなり。如此消極的の勤儉貯蓄論が世上に彌漫して爲めに國を誤るや實に恐る可し。以上唯例證を擧ぐるに過ぎず、茲に其の詳細の說明を試みるを得ず。或は時の必要に應じて異日世に公にして問ふ所あらん。唯經濟史の研究は時事問題の解決社會の活問題の了解に最も必要なるの好適例として、茲に余が指導の下になれる左右田喜一郎氏のメルカンチリズムに關する研究を江湖に紹介せんと欲す。（左右田氏著メルカンチリズムに關する學說の發展（經濟叢書掲載））左右田氏の論文の主要なる點は、經濟學史は其源を經濟史に發し、先づ一時代の經濟狀態の變遷發展を窮めたる後にあらざれば、其の時代の經濟學說に於ける變遷は不可解の怪象にして、經濟學上の學說は常に必ず其の國其時代の現實經濟生活の權化に外ならざるの理を明示し、併せて近來十七・八世紀の歐洲經濟狀態に關する研究進歩せるの結果として、メルカンチルシステムに對する學者の見解一大變化を來したるの狀を紹介し、彼の重商主義若くは重金主義等の陳腐なる譯語によりて謬まられたる我經濟學界に、メルカンチリズムとは要するに國民經濟建設の順序上、各國が一度は通過したりし活社會の事實にして、死せるドグマ、机上の空說に非ざる所以を示したるにあり。蓋し此の意味に於て解釋する時は、メルカンチリズムとは遠き外國の遙か昔の事にあらずして、近く我邦にも其名こそなけれ、亦同一の現象の存したるを知るに難からざる可し。實に或意味に於ては今日の文明國中此のメルカンチリズムの理想を最も完全に遂行したるは英國にあらず、獨逸にあらず、佛國にあらずして、德川幕府の鎖國時代に於ける我邦なりし所以を瞭然悟了するを得可きなり。左右田氏の此の論文たる元より多忙なる學窓の餘暇に成れるものなるが故に、之れに向て完璧を望むは不當の事なり。氏自ら曰く『若夫れ經濟政策全般に關する研究に至ては請ふ他日を待て』と。然れ共此一部分研究の結果に就て之れを見るも又頗る有益の資料たらずんばあらず。而して吾人は此の研究の結果又現時商政の活問題を解決するに大に學ぶ所あり。左右田氏曰く『メルカンチリズムの眞相を解せるものにあらざれば以て共に今日の經濟政策を談ずるに足らず』と。然り。彼の世界政策や帝國主義や必竟ずるに嘗てメルカンチリズムを產出せると同一の社會が進歩發展の結果として近時に至り發生したる現象とす。加之我邦刻下の問題たる商政の將來殊には支那米輸出解禁問題の如き、此メルカンチリズムの研究によ

りて得たる處によるにあらざれば、公平嚴正國民をして適歸する所を知らしむ可き解決を下す能はず。世上の識者若し左右田氏の論文に就て思を潛めて研究するあらば、時事問題解決の最上指針は常に必ず經濟史の研究に胚胎する事を悟了するに於て餘師あらん。是れ予の左右田氏の論文を取て敢て世上の識者に薦めんと欲する所以なり

右一文三十五年十月執筆雜誌『經濟叢書』に掲げて左右田氏論文の序としたるものなり。

爾來左右田氏の研究は愈進みて予輩の研究は依然として同一所に徘徊しつゝあり。予は唯だ此文を本書に收めて、當時の感想を追憶するの料と爲すものなり、